

「天国の窓」に寄せて

主任司祭 吉池 好高

「天国の窓」をもう手にとってご覧になりましたか。われらがハレレ、晴佐久昌英神父が司祭叙階二十五周年を期して出された新しい詩集です。外側に向って開け放たれた窓の向こうには、まだ薄暗い緑の丘陵が眼下に広がり、光を増してゆく早朝の大気の中、大きく輝く雲が目の前を流れて行きます。表紙を飾る菅井日人さんの清々しい写真の上方には「天国の窓」という書名が浮き出し、写真の左下には、「ある朝目覚めると窓があいていた」という本文の中の詩の一節が付されています。こんな目覚めの朝があるのです。

誰もいない、独りきりの司祭館に二十年以上も寝起きして、こんな目覚めの朝を迎えた日がどのくらいあったといえるでしょう。起き出して窓を開けるのも億劫な朝、寝て起きてても疲れのたまったままの心で、窓を開けて見ても、晴れているか、曇っているか、雨が降っているかの違いだけ。着替えをして外に出て、聖堂の扉を開けなければ一日が始まらないと分かっている、ミサが終わって戻ると窓は閉まっていて、窓の内側にいて、窓に守られて、窓から覗くようにして過ぎて行く日々。窓を開いて、窓から大声で叫んで見ても、通り過ぎて行く人々の一日には何の変化も起こらない、窓が邪魔に思える日々。けれども、そんな人に知られない日々の中で、「ある朝目覚めると窓があいていた」という朝は確実にあったのです。「天国の窓」というこの詩集はそんな朝の証言です。外側から開かれた窓を通して見た天国の福音宣言です。

「天国の窓」を通して、晴佐久神父と菅井日人さんに見えた、天国そのものを味わってください。晴佐久神父の詩が菅井日人さんの写真を生み出したのか、菅井日人さんの写真が晴佐久神父の詩を生み出したのか分からないほどに、二人の魂は一つに溶け合い、天国の窓から見える、キラキラと輝く天国の風景に陶醉しています。窓を内側から開くことも必要でしょう。そのためにも、この素敵な詩集が外側からあなたの心の窓を開いて、晴佐久神父と菅井日人さんが見た天国に誘ってくれますように。窓が開かれたなら、そこに天国が広がっているのです。